

ネクストプログラムの検証 — 「大学教育の改善に関する調査」の分析から—

蝶 慎一（大学教育基盤センター准教授）

1. はじめに

1-1. 本稿の目的と検証の背景

本稿の目的は、香川大学（以下、本学）における「所属する学部での学習（学位プログラム）に加え、学部の枠を超えて、主体的に学習する自由参加型の特別教育プログラム」（香川大学教育・学生支援部修学支援課、2023a）（以下、ネクストプログラム）を分析対象として設定し、本学の関連する調査結果に基づき、基礎的な分析を行うことである。

後述するように、ネクストプログラムは、「副専攻型」の教育プログラムと表現することがある（詳しくは、後述の表1参照）。そもそも日本の大学における「副専攻制度」とは何か、近年の概況はいかなるものか、こうした前提となる全国動向をあらためて確認しておきたい。まず、「副専攻制度」の定義であるが「主専攻以外の分野の授業科目を体系的に履修させる」（大学改革支援・学位授与機構、2016、72頁）制度とされる。ここで重要なのは、「主専攻以外」の「授業科目を体系的に履修させる」という点である。換言すれば、学生自らが特定の専門分野以外、一般には、自身の所属学部・学科等以外の授業科目を履修することに加え、それらの科目を「体系的に」学ぶことに重点が置かれる。

こうした全国の国公私立大学における「副専攻制度」の動向については、文部科学省が継続的に実施している「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」の調査結果を通じて把握できる。図1は、国立、公立、私立の設置者別に「主専攻・副専攻制を導入している大学」数の経年推移をグラフで示したものである。中央教育審議会が『学士課程教育の構築に向けて（答申）』が出された2008年度の状況から詳しく見ると、国立で34大学、公立で11大学、私立で122大学が導入しており、合計167大学が導入していた。そして、2021年度の状況を挙げれば、国立で54大学、公立で27大学、私立で201大学にのぼっており、合計282大学まで増加している。特に、設置者数別の増加率を見ると、国立、私立ともに約1.6倍、公立に至っては約2.5倍まで急増していることが分かる。

こうした「副専攻制度」を導入する大学が急増する背景には、どのような要因やニーズ等が見られるのだろうか。あらためて時代を遡れば、先行文献として跡づけられるものに限っても、例えば、1990年代中頃から後半には、日本語教育の分野において「日本語教育副専攻」（丸山、2014、6頁）の設置をはじめ、「日本語教育実習」が「副専攻課程」（川越、1999、59頁）という形で展開されていたという。その後、2000年代中頃になると聖心女子大学では、「学科横断型」の「ジェンダー学副専攻」（鶴田、2007、166-167頁）が、同

志社大学では、「ジェンダー副専攻制」（山田、2006、116-123頁）が新設された。

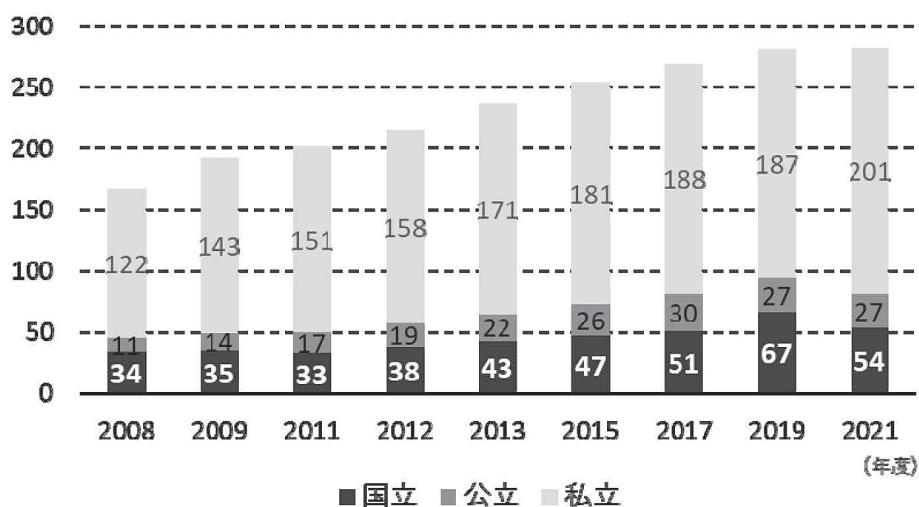


図1 「主専攻・副専攻制を導入している大学」¹⁾数の推移（単位：大学数）

出典：文部科学省高等教育局大学教育・入試課学務係（2023、14頁）、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2015、16頁）を参照し、筆者作成。

近年になると、「既存学部にはない文理横断・文理融合型の教育プログラム」（文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室、2022、1頁）の提供を模索する大学では、「副専攻」という形で学生の学修に対する多様な興味関心に沿うよう取り組みを拡大している²⁾。これは、多様化する大学教育において「専門知の組合せの増大を踏まえ、主専攻・副専攻制の活用などにより学生の学修の幅を広げるようなカリキュラム」（杉谷、2018、11頁）の開発を各々の大学が本格的に検討し始め、それを進展させてきたことが背景にあるだろう。更には言えば、こうした「副専攻制度」の新たな動きは学士課程教育にとどまらない。直近では、学士課程以上に特定の専門分野に特化する修士課程、博士後期課程の大学院教育カリキュラムにおいても、「副専攻制度」を通じて専攻が異なる教員（指導教員とは異なる教員）や、専門分野を異にする大学院生どうしが共に学べる体系的なプログラムが相次いで創出されている実態がある³⁾。「副専攻制度」の導入には多様な要因が存在するため網羅的に述べることは難しいものの、副専攻にかかる取り組みは、全国レベルで急速に進展していることは疑いない。

1-2. ネクストプログラムに関する第4期中期目標・中期計画の記述

本学における「副専攻型」の「教育プログラム」は、「特別教育プログラム」としてスタートしたネクストプログラムである（香川大学、2023a、2頁）。当初は防災士養成等のテーマ別のユニットから構成されており、副専攻とは言い難い側面もありネクストプログラムと命名してスタートしたが、その後、人文学などの分野別のユニットを開始するにあたり、

より副専攻的な側面が大きくなっている。それゆえに今では「副専攻型」と称しているのだが、これらネクストプログラムの端緒や経緯については、佐藤（2017）や石井（2019）が詳述しているので参照されたい。高橋（2019、1頁）によれば「本学では、特色ある取り組みとして評価を頂いている」のがネクストプログラムであり、学内外においても広く広報されている。本学の関連ウェブサイトをはじめ、『香川大学広報誌 かがアド』⁴⁾、配布される関連パンフレット⁵⁾ほか、多種多様なメディア媒体において紹介されている。入学前に多数の受験生が読む大学案内『KADAI Frontier 大学案内 2024』（例えば、83頁参照）にも大きく紙面が割かれ、広報されている。このように、本学の教育プログラムの一つとして期待が大きいのがネクストプログラムであることが再確認できるだろう。例えば、本学の上田夏生学長は、ネクストプログラムについて以下の通り、明確に述べている。

「今後、魅力的な新たなプログラムを順次予定しています。香川大学は、このような教育の工夫によって、皆さんの希望に添える多彩な教育プログラムを準備し、自信に満ちた人間として社会へ船出できるよう皆さんをサポートしていきます。」⁶⁾

こうした流れに沿うように、第4期中期目標・中期計画、なかでも中期計画においてネクストプログラムは明記されている。次の表1を確認すると、「中期計画」の「1-2」に「特定の専門分野以外の知見にも触れることで幅広い教養を身に付けさせるため、学士課程教育全体を通じて異なる分野についても学ぶ機会を拡充する」ことが記述されており、その「評価指標」として「副専攻型特別教育プログラム（ネクストプログラム）の履修登録者数」の増加が含まれていることが分かる。ネクストプログラムそれ自体は既に第3期中期目標・中期計画の中期計画において「新たなプログラムを構築する」と書かれており（香川大学、2016；石井、2019、3頁）、第4期中期目標・中期計画が初出というわけではない。しかし表1をあらためて見ると、「他分野の知見にも触れる」、「特定の専門分野以外の知見にも触れる」、「異なる分野について学ぶ」といったキーワード的な類似表現が複数散見されるのである。ここから浮かび上がるのは、本学の教育における中期目標・中期計画をめぐって、所属学部の専門分野や特定の専攻を超えるような学びやそれを具現化する機会としてネクストプログラムを重視する姿勢である。2020年春以降のコロナ禍を振り返れば、自らの学部の専門分野ですら体系的な学びが難しかったケースも存在しただろう。一方で、オンライン授業が主流になった時期には、ネクストプログラムの存在自体は知っていても、詳しい取り組み内容までは学生に直接周知できなかった可能性も推測されよう。

1-3. 分析するデータと本稿の構成

以上を踏まえ、本稿で具体的に分析するのは、大学教育基盤センター調査研究部（2023）が「本学の提供する大学教育の成果・効果を高めることを目的とし」、本学に「入学された方々を対象に実施」した「大学教育の改善に関する調査」の結果データである。当該調査は、

学生自身の「これまでの大学における学習経験」や諸活動について幅広く問う設問で構成されており、その一部にネクストプログラムに関してたずねた項目が含まれている（香川大学大学教育基盤センター調査研究部、2023）。具体的には、ネクストプログラムへの参加の有無、不参加の理由、各プログラム（グローバル人材育成プログラム、防災士養成プログラム、ヒューマニティーズ（人文学）プログラム、DRI イノベーター養成プログラム）の周知状況等が主な項目内容の要約である。回答者数は、541名（男性281名、女性260名）であり、そのうち2022年度入学者が531名で全体の約98.2%を占めている。それ以外の残り10名（約1.8%）は、2021年度以前の入学者という属性である。

本稿の構成は、以下の通りである。まず、ネクストプログラムにおける各プログラムの概要（【目指すこと】、【プログラム対象学生の条件・要件】、【説明会（2023年度開催状況）】）をあらためて整理する（2.）。次に、「大学教育の改善に関する調査」の結果データを分析し、ネクストプログラムにおける学生の参加状況やその実態を明らかにすることで、そこでの問題点を洗い出す（3.）。おわりに、以上の分析を踏まえ、今後、ネクストプログラムの取り組みにおいて議論が必要と考えられる検討課題や論点を析出し、考察を試みる（4.）。

表1 第4期中期目標・中期計画におけるネクストプログラムをめぐる記述

中期目標	中期計画
2 教育	2 教育に関する目標を達成するための措置
(1) 「特定の専攻分野を通じて課題を設定して探求するという基本的な思考の枠組みを身に付けさせるとともに、視野を広げるために他分野の知見にも触れることで、幅広い教養も身に付けた人材を養成する。(学士課程)」	1-2 「特定の専門分野以外の知見にも触れることで幅広い教養を身に付けさせるため、 <u>学士課程教育全体を通じて異なる分野についても学ぶ機会を拡充する。</u> 」 【評価指標】 「a. <u>異なる分野について学ぶ分野横断型授業科目等の授業科目数、他学部履修科目（高度教養教育科目を含む）や副専攻型特別教育プログラム（ネクストプログラム）の履修登録者数</u> （令和9年度実績を令和3年度実績（分野横断型授業科目数18科目、他学部履修科目登録者数43人、 <u>副専攻型特別教育プログラム履修登録者数349人</u> ）と比べて10%増加）」

出典：香川大学（2023a、2頁）、香川大学（2023b、2頁）より抜粋し、引用、筆者作成。

注：全角・半角、フォントの変更、太字強調、下線強調、括弧の追記等は、筆者による。

2. ネクストプログラムにおける各プログラムの概要

表2の通り、現在、「ネクストプログラム」には大きく4つのプログラムが行われている。具体的には、「グローバル人材育成プログラム（英語コース／中国語コース）」、「防災士養成プログラム」、「ヒューマニティーズ（人文学）プログラム」、「DRI イノベーター養成プ

プログラム」である。例えば、「グローバル人材育成プログラム」では、「国際的に通用する語学力と、国際的視野に立った専門知識や技能を深め、グローバル化の進む地域社会の課題解決に貢献できる人材」の「育成」を目指し、英語や中国語の語学力向上と並行して「1年間の留学」（カリフォルニア州立大学フラトン校、上海大学、国立政治大学等）経験から学ぶプログラムである（香川大学教育・学生支援部修学支援課、2023a）。「ヒューマニティーズ（人文学）プログラム」は、「人文学のさまざまな分野（哲学、歴史学、文学、芸術学、言語学、人文地理学、文化人類学、社会学）を学ぶことによって、多角的な視点で物事を捉えられる力」を養成することを目指し、人文学の多様なバックグラウンドを持つ「アドバイザー教員との面談」や、多様な学部の学生どうし・教員と研究内容の定期的な報告機会が設けられている（香川大学教育・学生支援部修学支援課、2023a）。

加えて、各プログラムの周知に関わる点であるが、ほぼすべてのプログラムで説明会の機会が設けられている（表2参照）。また、「ヒューマニティーズ（人文学）プログラム」では、「アドバイザー教員」が担当する全学共通教育の関連し得る授業科目のオリエンテーション等で専用のチラシを作成し、独自に配付等も行われている。

表2 ネクストプログラムにおける各プログラムの概要

プログラム名称	概要	参加人数
グローバル人材育成プログラム (英語コース)	<p>【目指すこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際的に通用する語学力と、国際的視野に立った専門知識や技能を深め、グローバル化の進む地域社会の課題解決に貢献できる人材を育成。 <p>【プログラム対象学生の条件・要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 入学後、参加を希望する学生に対してヒアリングを実施し、選抜。1年次の7月にTOEIC550点以上取得できることが選抜の目安。 <p>【説明会（2023年度開催実績）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 2023年4月4日（火）午前にガイダンス、説明。 	26名 (2023年 5月現在)
グローバル人材育成プログラム (中国語コース)	<p>【目指すこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際的に通用する語学力と、国際的視野に立った専門知識や技能を深め、グローバル化の進む地域社会の課題解決に貢献できる人材を育成。 <p>【プログラム対象学生の条件・要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 入学後、中国語の履修学生の中で参加希望の学生に対して面接を実施。学習状況や意欲から、留学前に 	15名 (2023年 6月現在)

	<p>HSK4 級レベルに到達する見込みがあるかどうかを審査。</p> <p>【説明会（2023 年度開催実績）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 中国語の授業中にプログラムの説明を実施。全学共通科目の初修外国語で予め中国語の履修希望を提出し、中国語 I の登録を行った人のみプログラムに参加可能。 	
防災士養成プログラム	<p>【目指すこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> 防災士を取得し、職場や地域で防災活動を行うことができる人材を育成。 <p>【プログラム対象学生の条件・要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 年次に全学共通科目として防災士養成関連科目を開講し、当該科目を履修した学生は防災士資格取得試験を受験できる。防災士資格取得試験の合格者の中からプログラムの参加学生を募集。 <p>【説明会（2023 年度開催実績）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 年次の参加希望者：特別主題（地域）「防災リテラシー養成講座（災害を知る）A」を受講。 2 年次以上の参加希望者：4 月 11 日（火）12:10～12:30 のオンライン（Zoom）説明会に参加。 	60 名 (2023 年 7 月現在)
ヒューマニティーズ (人文学) プログラム	<p>【目指すこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> 人文学の様々な分野（哲学、歴史学、文学、芸術学、言語学、人文地理学、文化人類学、社会学）を学ぶことで多角的な視点で物事を捉えられる力を養成。 <p>【プログラム対象学生の条件・要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学部の学生が参加可能。 <p>【説明会（2023 年度開催実績）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 2023 年 4 月 4 日（火）午前にガイダンス、説明。 	51 名 (2023 年 5 月現在)
DRIイノベーター 養成 プログラム	<p>【目指すこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> DRI を通して、あらゆる人間が安心して生活できるためのイノベーションを創造できる人材を育成。 <p>【プログラム対象学生の条件・要件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学部の学生が参加可能。なお、創造工学部の学部学生は「I コース」にのみ登録可能。 <p>【説明会（2023 年度開催実績）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 2023 年 4 月 4 日（火）午前にガイダンス、説明。 	544 名 (2023 年 6 月現在)

出典：香川大学教育・学生支援部 修学支援課（2023a;2023b;2023c）より一部引用・修正加筆し、筆者作成。
注：「グローバル人材育成プログラム」については、「英語コース」と「中国語コース」に分けて整理した。

また、「参加人数」の欄は、香川大学教育・学生支援部 修学支援課（2023c）を参照し、特に「グローバル人材育成プログラム」及び「DRI イノベーター養成プログラム」については、「参加登録者数」を記載している。引用に際しては、煩瑣を避けるため厳密にカギ括弧等を付していないことを断っておく。

3. ネクストプログラムをめぐる学生の参加状況とその理由

3-1. 学生の参加状況について

まず、ネクストプログラムにおける各プログラムにおいて、参加の有無がどのような実態であるのかを見ていきたい。「各プログラムについて、参加しているか」を直接たずねた結果を示したのが次の図2である。

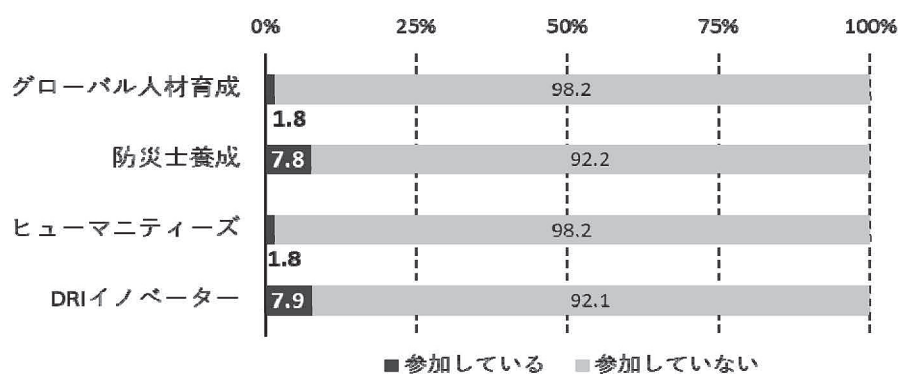


図2 ネクストプログラムの参加の有無

出典：「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注：本図にかかる設問（問11）の文章は、「各プログラムについて、参加しているか、どれくらい知っているかを教えてください」である。

図2の結果から分かるのは、「防災士養成プログラム」及び「DRI イノベーター養成プログラム」では92%以上の学生が、「グローバル人材育成プログラム」及び「ヒューマニティーズ（人文学）プログラム」に至っては98%を超える学生が「参加していない」と回答していることである。1. の冒頭で引用したように、ネクストプログラムは「主体的に学習する自由参加型」の「特別教育プログラム」であることから本学のいずれの学部生も必修（卒業要件）ではない。しかしながら一方で、「参加している」学生が決して多いとは言い難く、個別に各プログラムの「参加」状況を見ると2%にも満たない実態があることは引き続き留意したい（図2参照）。

3-2. 学生に対する周知の状況について

次に、ネクストプログラムに「参加していない」学生に対してどの程度の周知がなされているのかを見ていきたい。図2で「参加していない」と回答した者のうち、「どれくらい知っているかを教えてください」（「よく知っている」、「あることは知っているが内容は知らない」

い」、「まったく知らない」とたずねたのが次の図3である。

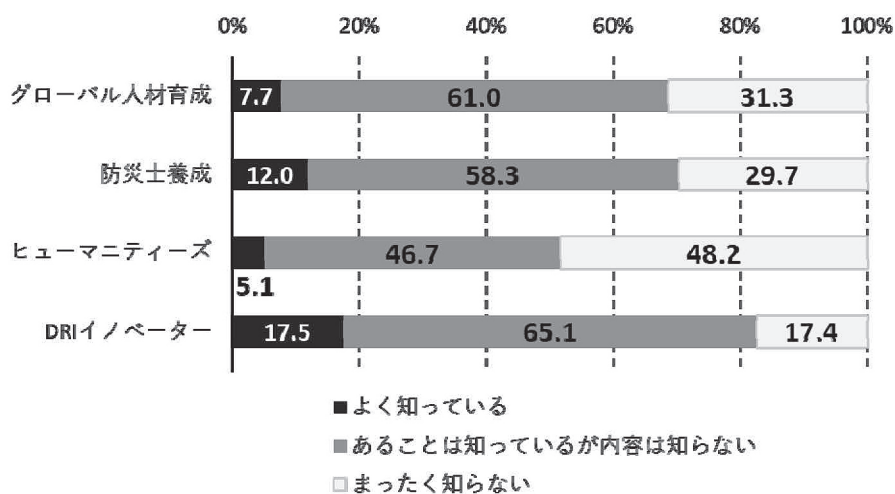


図3 ネクストプログラムに参加していない学生の周知状況

出典：「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注：前掲図2の注と同一。

図3の結果から分かるのは、全体的な傾向としていずれのプログラムについても、少なくとも存在は知っている（「よく知っている」と「あることは知っているが内容は知らない」）学生が半分以上を占めていることである。なかでも、「DRIイノベーター養成プログラム」では約83%の学生が知っている状況があり、「参加していない」学生であっても、その大半は存在を知っている状況は評価できるだろう。

3-3. 学生が参加しない理由について

しかしながら一方で、ネクストプログラムの存在を知っていながら、なぜ多くの学生は「参加していない」のだろうか、という疑問が浮かんでくる。そこで、この疑問を考えるべくネクストプログラムに「参加しない」理由について詳しく見ていこう。

図2及び図3で「参加していない」と回答した者のうち、「ネクストプログラムに参加しない理由はどのようなものですか」を選択肢ごとに整理したのが次の図4である。

図4の結果を詳しく見ていくと、不参加の理由には大きく3点に整理できる。第1に、学生側の「時間的余裕」のなさである。つまり、不参加の理由で最も多く選ばれている選択肢は、「他にやりたいことがあり、参加する時間的余裕がないから」(36.8%)である。また、ほかの選択肢の不参加の理由に「キャンパス間移動等の問題があり、継続して参加できないから」(18.1%)が3番目と上位に挙がっており、「キャンパス間移動等の問題」は、先の「参加する時間的余裕がないから」にも関わる懸念につながっている可能性が考えられる。第2に、ネクストプログラムに関する「情報」の未周知や理解不足である。図4の2番目に多い選択肢として「登録方法など、詳しい情報が分からないから」(21.3%)が挙がっており、「そもそも知らなかったから」(17.0%)も4番目に多くなっている。そして第3

に、所属学部の専門分野とは異なる授業を取ることに積極的ではない学生が少なからずいることである。図4では、「扱われているテーマには関心はあるが、内容が難しそうだから」(12.9%)や「大学での学びは、所属する学部での学修で十分だと思うから」(9.4%)がこの状況を如実に示しているだろう。今後詳細は検討が必要となるが、「興味があるテーマが扱われていないから」(6.1%)の選択肢を選んでいる学生も一定数いることには留意しておきたい。

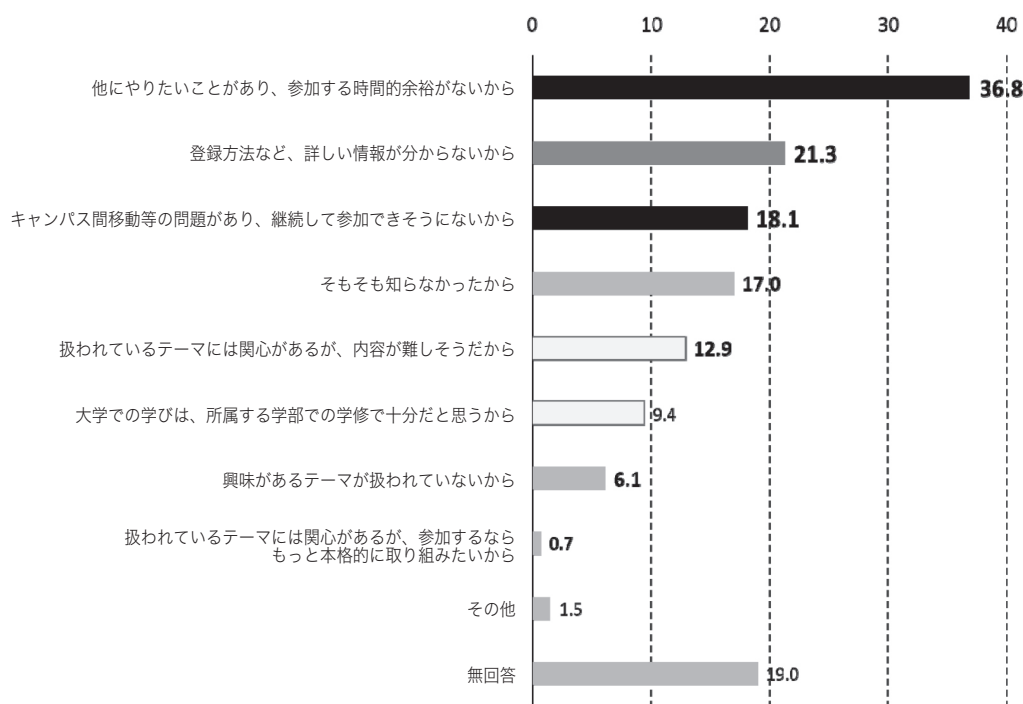


図4 ネクストプログラムに参加していない学生の不参加の理由 (単位: %)

出典: 「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注: 本図にかかる設問 (問12) は複数選択可のため、本設問の全回答数は、N=773。

4. おわりに—ネクストプログラムの更なる充実に向けての検討課題—

以上の分析を踏まえながら、本節では今後のネクストプログラムの充実とその改善に向けて議論が必要と考えられる検討課題について、以下3点考察したい。

第1に、ネクストプログラムにかかる時間的制約、時間的負担についてである。既に図4で明らかになったように、「参加する時間的余裕」のなさは、ネクストプログラムに不参加の最大の理由として挙げられていた。そこで同じ「大学教育の改善に関する調査」結果に基づき、授業をめぐる学習や諸活動に費やす1週間での平均時間がどのような状況になっているのかを考えるべく整理したのが次の図5である。例えば、1週間で「アルバイト等の仕事経験」に費やす時間が11時間以上の学生は、47.5%を占めており、回答者のほぼ半数の学生は単純に平均しても1日1.5時間以上の「アルバイト等」をしていることになる。加えて、「サークル・クラブ活動」に費やす時間についても6時間以上の学生は、75.2%を示

している（図5参照）。ここから正課外の活動に少なからず時間が取られている事態が垣間見える。「アドバイザー教員」とのやり取りや、各自の自習時間の確保を含め主体的な学習が求められるネクストプログラムにおいて、特に時間面で、どのような学習支援、アドバイジングが求められているのか⁷⁾、具体的な方策を検討する必要があるだろう。

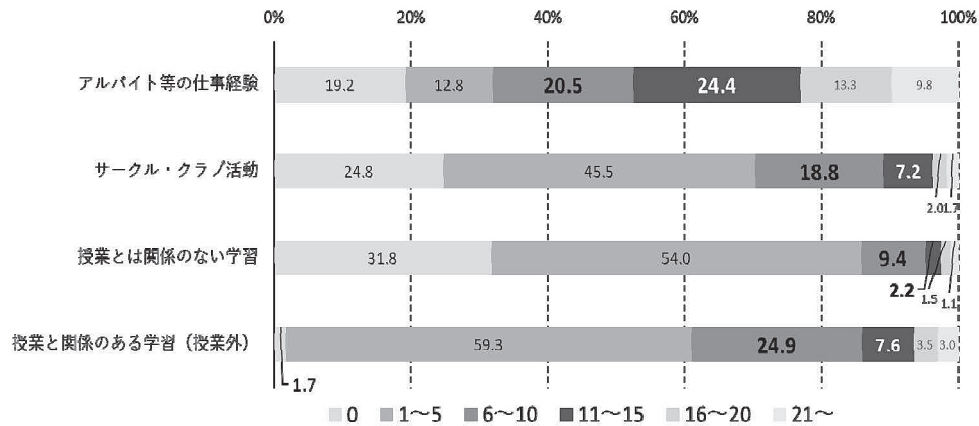


図5 授業をめぐる学習や諸活動に費やす1週間での平均時間の状況（単位：％）

出典：「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注：本図にかかる設問（問5）の文章は、「あなたは今年度、授業が行われている期間に、以下の活動に1週間でどのくらいの時間を費やしましたか」である。また、当該設問（問5）では「21-25」、「26-30」、「31時間以上」でデータが取られているが、ここではこれら3つの時間幅が示している数値を合計し「21～」として算出した。なお、四捨五入により一部誤差があることをあらかじめ断っておく。

第2に、ネクストプログラムに関する正確な「情報」提供についてである。表2で確認したように、現行では新入生ガイダンスの早い時期に「説明会」等を通じて詳しい紹介をする機会が設けられている。一方、図4の「不参加」の理由によれば、「そもそも知らなかったから」という学生も一定数存在しており、若干の周知不足の感は否めない。まずは年度初めのみではなく、各クォーターの開始直前なども各プログラムの登録期間とも連動させながら繰り返し周知を図っていくことを検討しても良いだろう。

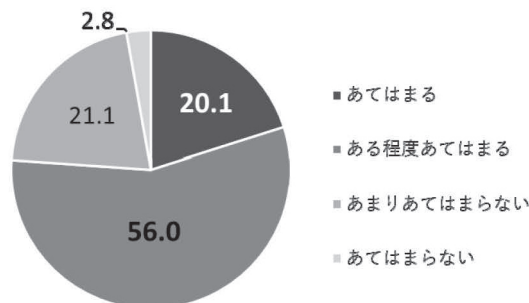


図6 できるだけ良い成績が取れる授業科目の履修について（単位：％）

出典：「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注：本図にかかる設問（問8）の文章は、「なるべく良い成績がとれる授業を履修している」である。N=541。

加えて、「情報」という点では、成績に対する正確な認識の共有が必要になっている可能性がある。正確に論証はできないものの、例えば「なるべく良い成績がとれる授業を履修している」かをたずねた図6を見ると、本学の学生はできるだけ良い成績を取りたいと考える者が約76%にのぼっており、ネクストプログラムにかかる授業科目をはじめ、他学部等の授業を履修したことで良くない成績が付く場合を躊躇する学生がいる可能性が考えられる。逐次、評語を含めた成績付けに敏感になっている学生がいても不思議ではない。現行の「説明会」実施や関連のウェブサイト等でも、こうした成績を含めたネクストプログラムでの学びの成果を学生側に明示できるか、学生がアカデミックな関心をコアとして成績付けに過剰に敏感になり過ぎず、安心して学べるキャンパスの雰囲気醸成すべきだろう。

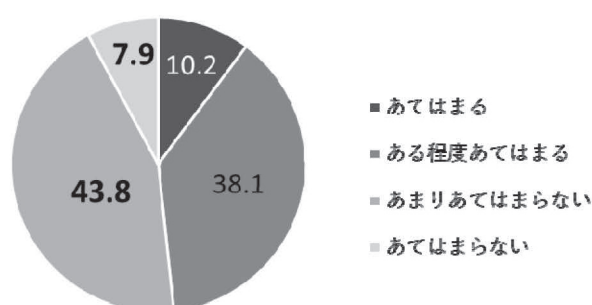


図7 自身の専門分野と異なる授業科目の積極的な履修について (単位: %)

出典: 「大学教育の改善に関する調査」の調査結果に基づき、筆者作成。

注: 本図にかかる設問 (問8) の文章は、「自分の専門と異なる科目 (文系学生は理系的な科目、理系学生は文系的な科目) を積極的に履修している」である。N=541。

そして、第3として、学生に対し自身の専門分野とは異なる体系的な学習を積極的に促すことである。そのように考える理由は、「自分の専門と異なる科目 (文系学生は理系的な科目、理系学生は文系的な科目) を積極的に履修している」かをたずねた図7を見ると、自身の専門分野とは異なる授業を積極的には履修していない (「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」) 学生が約52%もいるからである。所属学部のカリキュラムや研究室での役割、学生自身の時間割の都合等で実際には専門とする分野以外の履修が困難な学生もいる。ただネクストプログラムは、「学部の専門教育では得られない特徴ある知識技術の場」(高橋、2019、1頁)であり、それらを体系的に学べる絶好の機会である。学生自身がネクストプログラムを通じて自分だけのオリジナルな体系的な学びを進めることは、本学の教育が「2040年以後の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」(中央教育審議会、2023)にも大きく貢献することにも結実する。

最後に、ネクストプログラムの検証課題として残された作業を挙げれば、ネクストプログラムに「参加している」学生、あるいは、それらの修了生が、そもそも入試の段階でどのような入試選抜の区分 (例えば、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜等) で本学に入学した学生だったのか⁸⁾、また、全学共通教育での成績や必修単位の修得状況はいかなるものであったのか、と言った学生の様々な属性・特徴等と関連させた分析、検証作業、

教学 IR の視点から見た精緻な検討も求められてくるだろう。この点は、別稿を期したい。

注

- 1) 文部科学省高等教育局大学教育・入試課学務係（2023、14 頁）より引用。
- 2) 例えば、昭和女子大学データサイエンス副専攻プログラム (https://www.swu.ac.jp/examinee/student/curriculum/data_science.html) < 2023 年 11 月 7 日アクセス >、同志社大学サイエンスコミュニケーター養成副専攻 (https://biomedical.doshisha.ac.jp/science_communicator/science_communicator.html) < 2023 年 11 月 7 日アクセス >、が知られている。
- 3) 例えば、大阪大学大学院副専攻プログラム、大学院等高度副プログラム (<https://itgp.osaka-u.ac.jp/programs/list/advanced/>) < 2023 年 10 月 31 日アクセス >、島根大学大学院特別副専攻プログラム「イノベーション創出人材育成プログラム」(<https://tatara.shimane-u.ac.jp/docs/2020032700011/>) < 2023 年 10 月 31 日アクセス >、お茶の水女子大学大学院副専攻プログラム・キャリア副専攻 (<https://www.ocha.ac.jp/education/menu/030/050/d009542.html>) < 2023 年 10 月 31 日アクセス >、関西学院大学大学院副専攻「国連・外交コース」(<https://www.kwansei.ac.jp/unfa/graduate/guidance>) < 2023 年 11 月 7 日アクセス >、が知られている。特に、お茶の水女子大学大学院の副専攻「SHOKUIKU」については、その必修科目「エビデンス食教育論」での教授内容を取りまとめた文献『エビデンスで差がつく食育』（藤原、2017、i - ii 頁；藤原ほか、2017）が刊行されている。
- 4) 香川大学広報室（2023）を参照。
- 5) 香川大学教育・学生支援部修学支援課（2023b）を参照。
- 6) 上田（2023）より、一部引用。
- 7) 米国における学習成果を促進する取組としてのアドバイジングは、蝶（2021）を参照。
- 8) 例えば、敬愛大学における副専攻「AI・データサイエンス」では、「入試区分」として「AO・総合」、「推薦」、「一般」、「センター試験利用入試・大学共通テスト利用選抜」とこの副専攻の「申請状況」を分析しており（高橋ほか、2022、22-23 頁）、参考になる。

参考文献

- 蝶慎一（2021）「第 3 章 米国の学士課程教育におけるアドバイジング—学修成果（Student Learning Outcomes）を促進する取組として—」福留東土・戸村理・蝶慎一編『教養教育の日米比較研究』（高等教育研究叢書 158）広島大学高等教育研究開発センター、25-36 頁。
- 中央教育審議会（2023）『次期教育振興基本計画について（答申）【概要】』令和 5 年 3 月 8 日 (https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_oseisk02-000028073_2.pdf) < 2023 年 11 月 10 日アクセス >

- 大学改革支援・学位授与機構（2016）『高等教育に関する質保証関係用語集 第4版』大学改革支援・学位授与機構（紙冊子版）。
- 藤原葉子（2017）「はじめに」藤原葉子・石川朋子・赤松利恵・須藤紀子・森光康次郎・香西みどり・佐藤瑤子『エビデンスで差がつく食育』光生館、i - ii 頁。
- 石井知彦（2019）「ネクストプログラムに追加される新たなプログラムの検討の経緯」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第16号、3-7 頁。
- 香川大学（2023a）「第4期（令和4年度～令和9年度）中期目標・中期計画一覧表」（<https://www.kagawa-u.ac.jp/files/5416/8023/0811/ichiran20230329.pdf>） < 2023年10月31日アクセス >
- 香川大学（2023b）「第4期（令和4年度～令和9年度）中期計画」（<https://www.kagawa-u.ac.jp/files/8116/8023/0751/keikaku20230329.pdf>） < 2023年10月31日アクセス >
- 香川大学（2016）「第3期（平成28年度～平成33年度）中期目標・中期計画一覧表」（<https://www.kagawa-u.ac.jp/files/8314/5949/9362/3ichirann.pdf>） < 2023年10月31日アクセス >
- 香川大学大学教育基盤センター調査研究部（2023）「大学教育の改善に関する調査」2023年1月（香川大学教育・学生支援部 修学支援課提供）。
- 香川大学教育・学生支援部修学支援課（2023a）「ネクストプログラム」香川大学（リーフレット版）。
- 香川大学教育・学生支援部修学支援課（2023b）「ネクストプログラム」香川大学（パンフレット版）。
- 香川大学教育・学生支援部修学支援課（2023c）香川大学公式ウェブサイト「ネクストプログラム（特別教育プログラム）」（<https://www.kagawa-u.ac.jp/research/education/10373/>） < 2023年11月6日アクセス >
- 香川大学広報室（2023）「香川大学ネクストプログラム」『香川大学広報誌 かがアド』Vol.38、2023 SUMMER、06 頁。
- 川越菜穂子（1999）「大学副専攻課程における日本語教育実習について」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会編『日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集』くろしお出版、59-70 頁。
- 丸山敬介（2014）「最近の日本語教育をめぐる動きと同志社女子大学における日本語教師養成」『同志社女子大学日本語日本文学』第26号、1-34 頁。
- 文部科学省高等教育局大学教育・入試課学務係（2023）「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（https://www.mext.go.jp/content/20230908-mxt_daigakuc01-000031526_1.pdf） < 2023年10月3日アクセス >
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室（2015）「平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/

- daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2016/05/12/1361916_1.pdf) < 2023 年 10 月 3 日アクセス>
- 文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室 (2022) 「【資料 5-1】大学振興部会における論点例」 (https://www.mext.go.jp/content/20220617-mxt_koutou01-000023442_5.pdf) < 2023 年 11 月 8 日アクセス>
- 佐藤慶太 (2017) 「ネクストプログラムの拡充について」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 14 号、43-52 頁。
- 杉谷祐美子 (2018) 「これからのカリキュラムマネジメントを考える」平成 30 年度私立短期大学教務担当者研修会、2018 年 10 月 30 日、アルカディア市ヶ谷、スライド資料 (https://tandai.or.jp/manage/wp-content/uploads/%E6%95%99%E5%8B%99/2018kyomu_kenshu_kouen1.pdf) < 2023 年 10 月 3 日アクセス>
- 鶴田敦子 (2007) 「補章 大学教育におけるジェンダー学の導入—聖心女子大学におけるジェンダー学副専攻設置までの経緯」目黒依子編『ジェンダー学と出会う』勁草書房、161-170 頁。
- 高橋和子・米田紘康・森島隆晴・大塚慎太郎・工藤龍雄・三幣真理・成松恭平 (2022) 「敬愛大学における数理・データサイエンス・AI 教育 副専攻「AI・データサイエンス」と運営組織「AI・データサイエンス教育センター」について (特集「敬愛大学における AI・データサイエンス教育」)」『敬愛大学国際研究』第 35 号、3-38 頁。
- 高橋尚志 (2019) 「ネクストプログラム—生まれ変わる特別教育プログラム—」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 16 号、1 頁。
- 上田夏生 (2023) 「受験生の皆さんへ ～学長メッセージ～」香川大学公式ウェブサイト「ネクストプログラム (特別教育プログラム)」 (<https://www.kagawa-u.ac.jp/research/education/10373/>) < 2023 年 11 月 6 日アクセス>
- 山田礼子 (2006) 「17 社会学部の副専攻にジェンダー関連授業を創る」有本章・北垣郁雄編『大学力』ミネルヴァ書房、116-123 頁。